

### 3) ステロイド、低用量アスピリン療法が著効を示した典型的抗リン脂質抗体症候群の1例

田村 正毅・荒川 正人  
今井 勤・本多 啓輔  
関塚 直人・長谷川 功  
高桑 好一・児玉 省二  
田中 憲一 (新潟大学産婦人科)

過去2回妊娠6か月で子宮内胎児死亡を反復している抗リン脂質抗体症候群の1例を経験した。症例は30才であり、抗カルジオリピン抗体陽性、抗 CL- $\beta$ 2GPI 抗体 125 単位以上、APTT 99秒であり、典型的な抗リン脂質抗体症候群の症例である。今回妊娠では、妊娠前より柴苓湯を投与し、妊娠後ステロイド、低用量アスピリン療法を施行した。その結果妊娠は順調に経過し妊娠37週、2,762 g の男児を出生した。最近注目を集めている抗リン脂質抗体症候群について、文献的考察も加え報告した。

### 4) PDA に対する静注用インドメタシン使用と未熟児網膜症について

大石 昌典・山崎 明  
永山 善久・坂野 忠司 (新潟市民病院)  
小田 良彦 (新生児医療センター)

低出生体重児における静注用インドメタシンの副作用のひとつとして、未熟児網膜症 (以下 ROP と略) の重症化も考えられているが、今回我々の施設において症候性 PDA に対し、静注用インドメタシンの投与を行った12名について、静注用インドメタシンと ROP の関係について若干の考察を加え報告する。

【対象】平成7年1月より平成8年5月までに当センターに入院し心エコーにて PDA と診断された低出生体重児12名。(在胎週数25週5日~30週0日, 出生体重730 g~1,280 g)。

【結果】眼底における無血管野の広さが5乳頭径以上の2例のうち、1例が光凝固術を施行され、無血管野の広さが4乳頭径以下の児10例のうち、1例が光凝固術を施行された。また眼底所見より、インドメタシン投与児は非投与児に比べ ROP の重症化もしくは遷延化傾向があり、また投与時期が早いほど影響があるのではないかと思われた。

### 5) 在胎29週未満出生の極および超低出生体重児の長期予後

山崎 明・大石 昌典  
永山 善久・坂野 忠司 (新潟市民病院)  
小田 良彦 (新生児医療センター)

1987年4月より1989年12月の間に当院新生児医療センターに入院し生存した胎29週未満の極および超低体重児56名のうち、5年以上当科で経過観察し得た38名の長期予後につき検討した。

38名のうち27名が5~7才時にIQが測定されていたが、平均  $\pm$ SD は  $101 \pm 17$  であり、81%はIQ 85以上、67%はIQ 100以上であった。出生体重、存胎週数とIQの間には強い相関は認められなかったが、IQ 85以下の5名はすべてが出生体重 850 g 以下、在胎26週以下であった。

療育センター紹介後当院に来院しなくなった2名を含めると、上記期間での予後不良を疑われる児は当科で確認し得た限りでは14名であった。その内訳は CP 3名、癲癇2名、高度の弱視2名、IQ 60の精神遅滞児1名、IQ 71~84の境界児4名、行動異常が強く疑われる児が2名であった。

### 6) 羊水過少による肺低形成症例の検討

須藤 正二・許 重治  
星名 哲・田辺 昭子  
内山 聖 (新潟大学小児科)  
村川 晴生・本多 晃  
高桑 好一・田中 憲一 (同産婦人科)

近年、呼吸管理の進歩により、呼吸障害をもつ未熟児新生児の救命率は著しく改善された。しかしその一方でいまだ救命困難な疾患として肺低形成が挙げられる。今回当院において過去3年間に経験された羊水過少による肺低形成症例について報告した。

3例はいずれも在胎20週以前から羊水過少が確認され、保存的に治療を受けていた。羊水過少確認時から分娩までの期間はそれぞれ6, 10, 11週であった。生後直ちに高頻度振動換気法により管理されたが、全例で新生児遷延性肺高血圧症を呈し、2例で気胸を認めた。いずれも治療に反応せず、新生児早期に死亡した。肺低形成は一度発症すれば予後は不良であり、発症予防が重要と考えられる。その1つの方法として羊水補充灌流法があり、適応がある症例には施行する価値があると考えられる。